

【特集】

# ずっと、この場所で

高齢患者や、生活習慣病による患者の増加などで、これからますます高まる医療への需要。そして、病院ではなく自宅で医療を受け、療養しながら最期を迎えたいという人が多くいます。

「ずっと、自分らしくこの場所で」——。その要望に応えるのが「在宅医療」。安心して自宅などでの療養生活を可能にするため、医療・介護の職種間連携や療養者を支援する取り組みが進められています。

## 自分らしく暮らしたい 在宅での療養生活を支援

### 住み慣れた場所で療養 求められる在宅医療

今後、著しく高齢化が進み、市内の75歳以上の割合が2015年の17.9%に対して、40年には27.3%まで上昇すると予想されています。また、若くても生活習慣病や事故などで寝たきりになってしまふ場合もあり、医療への需要は高くなっています。

そのような状況の中、注目されているのが、自宅などの生活の場に、医師や看護師などが定期的に訪問し、診察や治療などをする在宅医療。健康状態の悪化などの理由で通院できなくなった場合や人生の終末期を、住み慣れた自宅や地域で過ごしたいという人が増え、在宅医療が求められています。

### かかりつけ医との信頼関係を

より良い医療を受けるためには、そのときだけ大きな病院に行



市民病院1階にある患者相談窓口では、社会福祉士などの専門職が随時相談に対応

### 米谷病院、豊里病院に 地域医療連携室を新設

けばいいというわけではありません。まずは、かかりつけの医師を持ち、信頼関係を構築することが大切。日々の診療や投薬の記録があることで、一人一人の体質や過去の病気、薬の副作用などを知ってもらうことができます。在宅医療を希望する場合にも相談に乗ってくれるはずですよ。

市民病院を退院した後に、通院することが困難な場合など、退院後の生活に不安を抱える人を支援するため、03年4月に市民病院内

に地域医療連携室を設置。患者相談窓口では、予約不要で相談することができ、在宅医療を希望する場合は、対応可能な医療機関を紹介しています。

今年の4月からは、米谷病院と豊里病院にも社会福祉士（ソーシャルワーカー）を配置し、退院後も、安心して療養生活を送ることができるよう、相談体制を強化しました。

### 一人一人に寄り添い 少しでも希望をかなえたい

登米市民病院の高橋地域医療連携推進専門監は「退院後、住み慣れた場所で過ごしたいという人は増えていますが、患者さんは、退院するときに食事や生活環境など、少なからず不安を抱えています。そして、患者さんの家族にとっては、介護などの悩みがあることも事実です。在宅医療は、医師をはじめ、さまざまな専門職の協力が必要で



市民病院地域医療連携室  
高橋 直子 専門監

ですが、何よりも家族の協力が不可欠です。私たちは、一人一人に寄り添って不安を解消しながら、本人や家族の希望をかなえる手助けをしていきたいと考えています」と話します。

### 地域の医療機関と連携した 救急医療体制の構築

在宅医療で心配になるのが、緊急時の対応です。市民病院では、昨年5月から在宅医療に取り組む医療機関と緊急時に連携する「在宅療養後方支援制度」を導入。在宅医療を受けている患者が、医療機関を通して市民病院に届出すると、緊急時などに市民病院が24時間体制で対応します。事前に患者の情報を共有するため、より適切な治療を受けることができます。安心して自宅で医療を受けながら生活できるように、地域の医療機関と市民病院との連携強化が進められています。